

自制心の育成について（叱るという観点から）

2014年1月1日 社会福祉法人 江刺保育園

年長児になると自制心が求められます。人はもともと自分の思うままに行動します。その行動を制御する役割を担っているのは脳です。大人の指導や友達、多くの人たちとの関わり合いの体験を通して、子どもは脳を成長させ自分自身をコントロールできるようになります。今回はこの自己抑制について考えてみます。人間の適切な行動はその時代の思想や考え方によって変化しています。主に宗教が大きな影響を持っているのですが、正しい宗教は社会において人として生きるための原理原則を道徳として示してきましたが、その道徳という名を借りて権力を持った特定の集団や個人が人の行動規範を強要する時代ではいつでも、社会は未来に対して盲目になり人心が疲弊し、戦争などの争いが起きています。人間は、歴史的な様々な困難を克服しながらこの社会の中でお互いが良く生きるために、自己制御という能力を身に付けてきました。



人間は主に4,5歳の時期から自制心を成長させる躰が行われてきました。現代社会においてその役割は家族であり、保護者の皆さんであり、そして私たち保育士、学校の教師たちです。子ども達の暴走する行動を抑制するための声掛けが多くなります。いわゆる叱るということですが、注意をしなければならないのが子どもの自尊心を傷つけないということです。具体的には、「嫌いだ、駄目な人、いない方が良い、生まれてこないほうが良かった、等」です。叱る言葉は行動に対する自制を促す言葉に限られるということです。具体的には、「これをしてはいけない。」という言葉です。これは行動が抑制できない時は大きな声であっても仕方がないと思います。逆に自尊心を傷つける言葉を優しい声で言ったとしても、その言葉は子どもの心を大きく傷つけます。大声で怒鳴られたとしてもその指摘が行動の自制を促すものであるなら、子どもとの信頼関係が壊れることはありません。逆に優しい声であっても子どもの自尊心や関係性を破棄するような言葉、また子どもの存在を否定するような言葉は、子どもとの信頼関係を根こそぎ崩壊させてしまうのです。

子どもの喜び、嬉しさや、親への甘えの行動を抑制することは誤った自制心を持ってしまうこともあり注意が必要です。その場合はそのまま受け入れてあげる方が良いのです。自制する能力が付いたかどうかは集団での活動の中で確認できます。ルールのある遊びの中で楽しく、たくさんの友達と遊ぶことができているならば、自制能力が身についていると判断できます。どこの保育所、幼稚園でも年長児になると発表会のために長期間の練習を行います、その活動の中で子ども達がお互いの理解を深め、相応しい行動ができるように自制心を養うことができます。その体験を通して信頼関係ができあがり、お互いの心を通わせることができます。その体験によって出来上がった演技を見た時、見ている者、そして演じている子ども達、双方ともに大きな感動を味わうことができます。

子どもたちは学校に進めばさらに多くの自制心が求められます。自制心という能力を正しく身に着けるためには、子どもが生まれた時から今までの間に継続されている大人との揺るぎない基本的な信頼関係が必要です。この信頼関係があつてこそ、自己抑制できる正しい自制心が身に着くのです。基本的な信頼関係、愛情関係がなければ自制心を躰けることは逆に虐待していることと同じになってしまうのです。すべては子どもへの無条件の愛情が土台になっているのです。

牛肉とゴボウの味噌丼(5人分)

牛肉 150g、グリーンピース少々
ゴボウ 80g、しょうが少々、
砂糖小さじ3、みりん小さじ5
みそ大きじ1

作り方

- ① ゴボウはササガキにして柔らかく煮る。
- ② ①に牛肉、グリーンピースを入れ、しょうが、砂糖、みりん、味噌で味付ける。
- ③ 味がしみたら、ごはんの上に乗せる。

